

『彼は『これ』は復讐ではない、と言った』の漫画の感想レビューに関するアンケート調査結果

■アンケート調査概要

調査目的	『彼は『これ』は復讐ではない、と言った』の漫画の感想レビューに関するアンケート調査
調査対象	『彼は『これ』は復讐ではない、と言った』を読んだことのある10代～50代の男女66名
調査期間	2025年10月15日～2025年10月20日 2025年10月31日 2025年11月28日 2025年12月27日 2026年1月10日 2026年1月31日 2026年4月24日
調査方法	インターネット調査
モニター提供元	クラウドワークス
データ使用サイト	https://glucks-web.co.jp/manga-zenkan/karehakorehahukusyudehanaitoitta/

■アンケート項目

Q1: 年代と性別を教えてください。

Q2: 『彼は『これ』は復讐ではない、と言った』を実際に読んだ感想を教えてください。

Q1: 年代と性別を教えてください。

30代男性	6人
30代女性	0人
40代男性	32人
40代女性	18人
50代男性	10人
50代女性	0人

Q2:『彼は『これ』は復讐ではない、と言った』の感想を教えてください。

『彼は『これ』は復讐ではない、と言った』1巻	大人になってからやり返すという復讐系の作品なのですが、なかなかエグイ内容だと感じました。龍吉からすると、プロ棋士になる道を永遠に閉ざされたわけで、一生恨んでもおかしくはありません。他人の一生を台無しにしておいて、のほほん和幸福な社会人生活を送っている主犯格には憤りを覚えました。天罰というか、正義の鉄槌を喰らわせて欲しいですね。
『彼は『これ』は復讐ではない、と言った』1巻	過剰なほど人としての尊厳をふみにじるような嫌がらせを受けるマンガはいくつも読んだことがありますが、濡れ衣を着せて将来の夢をぶち壊すパターンは初めて見たので、高校生が考えついたとは思えないほどの悪質さに鳥肌が立ちました。懐かしい思い出として過去にしていたことをとても楽しそうに語り、さらにその時の写真を未だにスマホに残してあるあたり、後悔も反省もしていないのは確実なので、はやく天罰が下ればいいのにと思いました。
『彼は『これ』は復讐ではない、と言った』2巻	たくさんの目がついた不気味なお面をつけた謎の人物が暗がりから現れて、無言のまま少しずつ近づいてきて最終的にドアップになる演出が、サイコホラーっぽくて良いなと思いました。また、通りすがりの知らない人から差し出されたお水を、疑いもせずあっさり飲んじゃう渡辺はウカツ過ぎると思いましたし、そこまで判断力を鈍らせるお酒って怖いなとも思いました。
『彼は『これ』は復讐ではない、と言った』2巻	ネットで話題になっていたのでも読んでみました。集団で一人にひどいことをして、無慈悲にも主人公の将来を不意にした人間のクズを成敗する勧善懲悪の物語です。私的にはこの手の話が大好きで、いったいどのようにしてクズを追い詰めて社会的にも、人間的にも追い詰めて落としていくのかを見るのがスカッとします。この巻はまだ序章といった感じで、これからどんどんと復讐が加速していくのだろうとクズの落ちていく様を楽しみたいと思います。
『彼は『これ』は復讐ではない、と言った』3巻	今回ターゲットとなった渡辺和馬は悲惨な末路をたどったわけですけど、正直スッキリしました。確かに目薬と称してラー油を目にさす等は酷い行為だとは思いますが、渡辺自身も他人にしたことのある行為です。他人にしてきたのだから、渡辺もされたとしても当然といえます。こういう感じで過去にされた行為をそっくりそのままやり返してくれたので、ざまあみろって感じでスッキリしました。
『彼は『これ』は復讐ではない、と言った』3巻	漫画好きの主婦目線で読ませてもらいました。3巻は、加害者が主人公と同じようにひどい目にあわされるところから始まります。もう、読んでいて「うわー、ゾッとする！」という場面の連続でした。私は幸いそんな経験はないのですが、それでも人の人生をめちゃくちゃにするようなことをする人は本当に嫌いです。だから、覆面の男がやっていることは「復讐ではない」と言っているけれど、まさに過去のひどい行いが自分に返ってきている「因果応報」だなと感じました。制裁のやり方が、昔の内容と全く一緒というのが怖いです。ノートが、まさかこんな形で使われるとは……。加害者が一人ずつターゲットになっていくので、次はどうなるんだろう？と先が気になって仕方ないです。この覆面の男が誰なのか、正体が早く知りたいです！シーンはきついですけど、悪いことをした人が罰せられるという展開は、読んでいてスッキリもします。
『彼は『これ』は復讐ではない、と言った』4巻	かつての加害者達が和馬の死をきっかけに色々考察している流れがめちゃくちゃ面白いですね。「自分たちに恨みを持っている人物は一人しかいない」という結論に達するので、その流れのスピーディさがとても興味深いです。龍吉の名前が上がり加害者達の疑念がさらに渦巻く感じは必見ですね。どんどん物語にゾクゾクとした雰囲気や漂い面白みが増していきます。
『彼は『これ』は復讐ではない、と言った』4巻	二人目のターゲットが北井に決まったようですけど、こちらにも天罰を喰らわせて欲しいですね。一人目の和馬と違って龍吉に対するエピソードは明かされませんでしたけど、自分の生徒に対して変な欲求を覚えるような人間です。周りを止めようなんてことはしていないでしょうし、むしろ助長するような行為をしてきたと思います。今は教師になって女子生徒との今後の関係がどうなるか気にしているみたいですけど、そんなことを考えられないように天罰を喰らわせてやって欲しいです。
『彼は『これ』は復讐ではない、と言った』5巻	加害者の一人である新一郎なのですが過去にこんな酷いことをしているのにも関わらず、今では高校の教師をしているというから驚きですね。こんな精神の人間が生徒に勉学を教えているなんてちゃんちゃらおかしい話ですね。しかも女子生徒のことを女性としてみているようでお近づきになりたいと強く思っている感じもかなり気持ち悪いですね。

『彼は『これ』は復讐ではない、と言った』5巻	北井への復讐はまだ始まったばかりですけど、最小限の行動で大ダメージを与えていてスッキリしました。実際覆面男がしたことといえば、宮山の目に自分の姿が映るようにしたことと、宮山にメッセージを送っただけ。宮山に嫌われたのは自爆したからです。結果宮山に嫌われることになりましたけど、覆面男自身はほとんど何もしていないんですよね。にもかかわらず、ここまで追い込んだのは見事としか言いようがありません。宮山のその後が気にはなりますが、スッキリしました。
『彼は『これ』は復讐ではない、と言った』6巻	宮山さんの気持ちを自分に都合の良いように曲解して力付くで彼女に迫っただけでなく、ちょっとでも抵抗されたら容赦なく暴力を振るう新一郎の人間性が最低すぎて、謎の人物が教室に現れた時はやっとヒーローが助けに来てくれたような心地になりました。でも、できれば宮山さんの見ているところで新一郎をスプラッターにするのは、彼女がかawaiiそうなのでやめてあげてほしかったと思いました。
『彼は『これ』は復讐ではない、と言った』6巻	二人目のターゲットとなった北井への復讐は果たせたと思うのですが、今回はちょっとやり過ぎかになって思いました。斧で北井に攻撃するという行為自体はいいんですけど、それを宮山の前でしてしまうということが気になったと言いましょか。これは絶対トラウマになると思います。いきなり先生に襲われたり、しかも殴られたり。挙句にその先生が目の前で斬殺されてしまうんですから。下手なホラー映画顔負けのエグいシーンをアリーナ席で見るわけになったわけですから、トラウマになることは確実でしょう。宮内のメンタルが心配になりました。
『彼は『これ』は復讐ではない、と言った』7巻	和馬を殺した犯人が龍吉なのかどうかとても気になっている利則の姿がとても印象深いですね。自分も次には襲われてしまうのではないかとかなり焦燥感に駆られている感じで俄然目が離せません。周の動向も気になっているようで彼が今海外に身を隠しているのではないかとって苛立ちを見せる姿も興味深く映ります。利則の感情が手に取るようにわかるので必見です。
『彼は『これ』は復讐ではない、と言った』7巻	仮面の男の正体が本当に龍吉なのかどうか調べるために利則が行動に出る姿が面白いですね。龍吉と仲の良かった北斗という男性とコンタクトを取ろうと画策していくので、その行動力の高さにすぐ目が離せませんでした。やっぱり自分の身が大事だということが利則の顔から強く伝わるので、その点も面白いですね。どんどん不穏な空気が利則に降りかかってくるので必見です。
『彼は『これ』は復讐ではない、と言った』8巻	「身体が痛い」や「無茶し過ぎた」など、北斗が呟いた意味深なセリフが非常に気になりました。いかにも謎の人物の正体は北斗だと言わんばかりの演出なので、逆に北斗は謎の人物ではなさそうで、だとしたら今回新しく登場した角松という棋士があやしいのかもしれないと思いました。また、新一郎の惨たらしい姿を目撃してしまった宮山さんがトラウマを抱えていないか心配していたので、意外と元気そうで安心しました。
『彼は『これ』は復讐ではない、と言った』8巻	龍吉と仲が良かった北斗の心情がとても伝わるエピソードでしたね。龍吉の辛さを一番に理解しているのは彼なのかもしれません。普段は工場で働いている北斗は常に龍吉のことを心配している感じでそわそわしている姿も印象的です。どんどんキャラクターが増えていき物語に厚みが生まれていることを感じられるので必見です。
『彼は『これ』は復讐ではない、と言った』9巻	刑事の山さんの姿がとてもいいですね。龍吉が重要参考人なのかもしれないとすぐに判断して彼の実家に行って何か情報を探そうとしている姿がとても印象的でした。やっぱり山さんはやり手の刑事ですね。どんどん仮面の男の影に近づいている感じで彼の行動からも目が離せません。この先にどんな真実が隠されているのかとても興味が湧きますね。
『彼は『これ』は復讐ではない、と言った』9巻	新一郎に対して「復讐ではなく敵討ち」だと発言したことにより、謎の人物の正体が龍吉である可能性はグッと低くなりましたが、今のところ一番あやしい北斗も、もう一人の候補である角松も確信できるほどの要素がありませんし、読者や警察の裏をかいてやっぱり龍吉という可能性もあると思うので、続きが非常に気になります。また、山さんが人情味があって渋い良いキャラクターなので、謎の人物と相対する展開になって命を奪われたりしないといいなと思いました。
『彼は『これ』は復讐ではない、と言った』10巻	北斗は仕事帰りに不穏な感覚に身を苛まれます。それは気のせいではなく利則が彼のことを見張っていて龍吉のことを暴こうと拉致してしまうので本当にこの大胆な展開には驚きを隠せませんでしたね。龍吉がとにかく気になる利則の必死さがとても伝わる話になっていたのも俄然目が

	離せませんでした。どんどんシリアスさに拍車がかかっているのを感じます。
『彼は『これ』は復讐ではない、と言った』10巻	龍吉が今どこにいるのか聞こうと北斗を強引に拉致してしまう利則の姿がとても面白かったですね。そこまでして龍吉のことが気になるということは完全に彼が犯人だと思っての行動でしょうね。一方の北斗もまた龍吉の親友という間柄利則に何も語らない感じもめちゃくちゃいいですね。緊縛した空気感が作画に匂い立っていたので読んでいてドキドキできました。
『彼は『これ』は復讐ではない、と言った』11巻	数子からの情報を聞いて利則がとても怯える流れがめちゃくちゃ面白かったですね。加害者達が次々と毒牙にかけられていく姿に自分も危ないという危機感が蠢いたのでしょね。表情からその感情が読み取れてめちゃくちゃゾクゾクしました。やっぱり仮面の男は龍吉なのでしょう。その展開が早く見たい気持ちで胸が高鳴ります。
『彼は『これ』は復讐ではない、と言った』11巻	小野川たちが角松に接触し、龍吉の身に起きた不幸すぎる出来事が警察の知るところとなりましたが、数子と利則の会話によれば、警察は今のところ和馬と新一郎が亡くなった事件を関連づけて考えてはいないそうなので、最終回までこのままずっと謎の人物に捜査の手は伸びないのか、それとも途中で気付かれて警察と周たちと謎の人物の三つ巴的展開になるのか、ワクワクしてきました。
『彼は『これ』は復讐ではない、と言った』12巻	利則が仮面の男に復讐されている場面がとにかく不気味で面白かったですね。最初、仮面の男が殺されてしまったのかと思いましたがそれは利則が見ていた幻覚だということがわかるので、その展開もかなり呆気にとられました。予想だにしない展開がかなり多い作品なので全く飽きることがなく、めちゃくちゃ楽しめること間違いなしです。
『彼は『これ』は復讐ではない、と言った』12巻	加害者達に復讐している仮面の男なのですが本当に容赦というものがありません。「あそこまで惨殺にしないでいいのに」と読み手が思うであろうほどのことを平然とやってのける感じでめちゃくちゃ爽快です。利則がバラバラにされる姿など、ここまで人を狂わせてしまうものだと痛感させられます。
『彼は『これ』は復讐ではない、と言った』13巻	優子は本当に嫉妬深い性格ですね。自分が主役に抜擢されなかったことを妬み後輩を怪我させて、その主役の座から引き摺り下ろしてしまうわけですからめちゃくちゃ怖い存在です。しかも優子のすごい所は何食わぬ顔で後輩のお見舞いに行き心配したそぶりを演じるという技まで使うので本当に現実にいたら恐ろしすぎますね。ここまで策士なキャラは正直見たことがありません。
『彼は『これ』は復讐ではない、と言った』13巻	本当に優子は野心家です。自分が主役をやりたいからと言って後輩に怪我を負わせてしまうわけですから本当にすごい執念です。ですがこれが優子のキャラクターをより強固なものに形成していたのですごく面白かったです。加害者らしい行動の数々に特に驚きはありませんでした。
『彼は『これ』は復讐ではない、と言った』14巻	優子は本当にわがままな女性です。マネージャーにジュースを買いに行かせて「ぬるい」と言って文句を突きつける姿は本当にどうかしています。そこまでの女優でもないのにあそこまで偉そうにできるのはやっぱり優子の性格がそうさせていることは明白ですね。本当に見ているとイライラするキャラなので必見です。よって復讐の展開にも熱が入ります。
『彼は『これ』は復讐ではない、と言った』14巻	本当にひとかけらの罪悪感も覚えていないことが伝わってくるセリフを口にしたり、和馬や北井、利則のことをバカにしたり、マネージャーの三太郎に対して高飛車な態度をとったり、とにかく優子へのヘイトがたまる回でした。これまでは謎の人物が加害者たちに鉄槌を下していましたが、さおりの無念を晴らすために、三太郎に頑張ってもらいたいと思いました。
『彼は『これ』は復讐ではない、と言った』15巻	加害者達が怯える展開がとにかく面白いですね。中でも田佐中優子の動揺している姿ときたら本当に滑稽すぎます。「自分は女優をしているから」といつも鼻にかけた感じで自信満々なのですが、いざ自分の身に危機が迫っているとわかると誰かれかまわず頼りにして身を守ろうとしている姿がとても笑えます。
『彼は『これ』は復讐ではない、と言った』15巻	前話で優子に睡眠薬入りのジュースを飲ませるのを失敗してしまったりしていたので、少々手際の悪さを感じる三太郎では復讐を完遂できないのではないかと不安を覚えていたため、防犯用のスプレーで反撃されてしまった時は予想通りだと思いました。その分、謎の人物が登場した際はこれで優子も痛い目に遭わせることができると安心を覚えました。

『彼は『これ』は復讐ではない、と言った』16巻	ある病院跡地に優子を連れてくる仮面の男の不穏な感じがとても表現されていて最高でした。案の定、そこに利則の死体が転がっていてわざと優子に見せつける感じが鬼畜ですね。「今からお前もこの状態になるんだ」ということをまざまざと見せつける仮面の男の真剣さがとても良かったです。優子が怯えている姿はやっぱり爽快です。
『彼は『これ』は復讐ではない、と言った』16巻	優子の目の前で、すでに絶命している利則の体に皮膚を溶かしてしまう液体をかけてみせることによって、彼女の恐怖心をあおるやり方にゾクッとさせられました。また、優子が誇りに思い、大切にしている美貌を台無しにして絶望させておいて、すぐに命を奪うわけではないというのも、謎の人物の抱える恨みつらみの深さを良く表していると感じました。
『彼は『これ』は復讐ではない、と言った』17巻	加害者であった周がかつての仲間達の謎めいた出来事を見て動揺を隠せない場面がとても面白かったですね。「次は自分が復讐される番なのか」と危機感をあらわにしている感じが作画から強く匂い立ってきましたね。作中、優子が復讐によって顔を焼かれてしまう展開にはかなり度肝抜かれましたね。ここまでのことを加害者達は龍吉にしたんだと改めて強さを感じました。
『彼は『これ』は復讐ではない、と言った』17巻	周が数子のことを本当に愛しているとは、キャラクター的にも彼女に指輪を渡した時の表情からも思えないので、なんでこのタイミングで数子に指輪を渡したのか疑問に感じ、なにか裏や企みがあるのではないかと勘ぐってしまいました。また、どう考えてもそんな場合ではないのに、優子に対してマウントをとろうとする数子の姿にあきれてしまいました。
『彼は『これ』は復讐ではない、と言った』18巻	自分が一番可愛いということはこのエピソードで強く読者に分からせてくれましたね。とにかく数子と優子のやりとりが本当に見苦しい感じで哀れです。自分だけが助かろうと掴み合いの喧嘩をしている姿がとても面白く映りましたね。その流れから数子が優子に致命傷を食らわせてしまう場面がありめちゃくちゃ緊張感が走りました。
『彼は『これ』は復讐ではない、と言った』18巻	謎の人物が数子に凶器を渡した時は、これまでの憂さを晴らすかのように数子が優子をメッタ刺しにする光景を想像しましたが、成人男性であるマネージャー相手にもしっかり反撃してみせた優子が数子に黙ってやられるわけがなく、予想以上の泥仕合っぷりで読み応えがありました。優子に比べれば大人しそうに見える数子の狂気をはらんだ表情にゾッとしました。
『彼は『これ』は復讐ではない、と言った』19巻	作中で周と弟である恭介のやりとり風景が描写されていたのですがそこでの会話がとても面白かったですね。恭介は兄に対して不満があるようでその不平を本人にぶつける姿がなんだかとても格好良かったですね。周は弟に言われたことが納得できなくてとても大胆な行動に出してしまうので、その緊迫した展開も見所の一つで最高でした。
『彼は『これ』は復讐ではない、と言った』19巻	将棋で対戦した結果、角松は謎の人物の正体は龍吉ではないと感じたようです。読者視点でも薄々そうだろうなどは思っていたのですが、では一体謎の人物は誰なのか、いよいよ気になってきました。また、周と彼の弟が対峙した際のやり取りから察するに、意外にも周の立場は謎の人物による一連の事件を抜きにしても順風満帆とは言えないようで、ちょっと驚きでした。
『彼は『これ』は復讐ではない、と言った』20巻	刑事の山さんというキャラが周の動向を探っているのですが、そのキャラがとても趣を感じる風貌で最高ですね。ザ刑事という雰囲気はかなり匂わせているので見つかったらすぐに怪しまれる感じバリバリです。でもやり手の刑事というわけではなく周の姿をあっさりで見失ってしまう流れなんかあってそのちょっと抜けた感じも彼の魅力になっています。
『彼は『これ』は復讐ではない、と言った』20巻	数子の気持ちがとても伝わるエピソードでした。過去に行ったことを懺悔する姿に信念のようなものがあってめちゃくちゃ想いが伝わりました。でもやったことは許せるものではないので、その辺も色々と考えさせられる回でもありましたね。どんどん作品に対してのシリアスさが増していきます。龍吉の辛さとても伝わるので目が離せません。

『彼は『これ』は復讐ではない、と言った』21巻	やまさんの部下である小野川の姿がかなり印象的でしたね。一年前の事件で山さんが小野川のことを叱った場面がとても印象深いです。山さんはやはりのベテラン刑事なので事件解決には余念がない感じで新米の小野川にすぐためになることを言ってくれるところが素晴らしいです。こういう展開はよくドラマなどでありますが、この作品でも描いてくれてすごクワクワクしました。
『彼は『これ』は復讐ではない、と言った』21巻	山さんの部下である小野川の変化が丁寧に描写されていくのでそこもすごク興味深かったです。龍吉の気持ちに寄り添いながら彼の気持ちになって犯人が犯行を犯すかということ色々と熟考していくのでその点がとても面白かったですね。加害者に対する気持ちも捜査当初よりも変化していてすごク彼に共感できました。
『彼は『これ』は復讐ではない、と言った』22巻	過去のエピソードが描かれていましたが仮面の男が常に持っている重要ノートのことがこの話で登場していたのですごク興味深かったですね。元々は将棋の勉強ノートという位置付けだったようでそれがどうしてここまで悲惨な感じに変わってしまったのかその点もわからないことが多いです。伏線が張り巡らされている感じでめちゃくちゃ面白いです。
『彼は『これ』は復讐ではない、と言った』22巻	やはり人間というものは嫉妬によって行動してしまうのだと強く思われましたね。嫉妬が人間の感情の大半を占めていることは間違いありません。それによっていざこざが生まれたりしてしまうのはある意味しょうがないことなのかもしれませんね。その雰囲気はこのエピソードで強く感じられたのである意味切ないです。
『彼は『これ』は復讐ではない、と言った』23巻	仮面の男の復讐は数子に向けられていました。本当に仮面の男の気持ちが全く見えないので不気味さが匂い立っていましたがそこに周がやってくるとは思いませんでした。正直、周が数子を手助けの流れになるのではないかと期待しましたが周の性質上違いましたね。本当にキャラの言動が読めない感じになっているのでその点も面白いです。
『彼は『これ』は復讐ではない、と言った』23巻	周が数子に指輪を渡した時からずっと、これは何かあるのではないかと怪しんでいたのも、発信機付きだったことが明かされた瞬間は思わず「やっぱりね！」と声に出してしまいました。また、周がなんのためらいもなく我が身を守るために数子を犠牲にしたシーンでは、優子に対する仕打ちを思えば因果応報とはいえ、ちょっと数子がかわいそうになりました。
『彼は『これ』は復讐ではない、と言った』24巻	仮面の男から逃げ惑う周の姿が本当に興味深いですね。森の中に逃げ込んで銃を構える周の姿にとっても緊迫した雰囲気があり目が離せません。個人的に最後に殺されるのは周だと思っていたので、この流れは想定通りですね。仮面の男の執念が周を追い詰めていく感じが最高に面白いので必見です。なんだか人間の心理にとっても訴えかけてきます。
『彼は『これ』は復讐ではない、と言った』24巻	とうとう敵討ちの相手が残り周1人のみとなり、謎の人物との直接対決が始まって、非常に緊迫感のある回でした。警察も頑張って2人のもとにたどり着こうとしているところなので、謎の人物はこのまま本懐を遂げられるのか、もしくは警察に邪魔されてしまうのか、はたまた周に返り討ちにされてしまうのか、次回が早く読みたくなる終わり方でした。
『彼は『これ』は復讐ではない、と言った』25巻	周と仮面の男の攻防中に刑事が登場という流れがとてもいいですね。「どうしてこんないいタイミングで刑事が現れるんだ」と言いたくなるような展開ですが、物語に緊迫感をもたらすにはすごクいい内容です。周の銃が暴発して山さんの足に当たってしまった場面はやはり切ないですね。なんとなく誰かが怪我しそうでしたが「よりにもよって山さんとは」と強く思いました。

『彼は『これ』は復讐ではない、と言った』25巻	周に撃たれそうになった謎の人物をとっさに助けた山さんの行動は、警察官なら当然のことかなと思いましたが、小野川が周を銃を所持している危険人物として制圧するだけでなく、一個人としての感情を込めて彼を攻撃した時はかなりびっくりしました。また、小野川が謎の人物を猟奇的なサイコパス扱いするのではなく、その行く末を真剣に案じてくれていたところにジーンとしました。
『彼は『これ』は復讐ではない、と言った』26巻	本当に仮面の男の優秀さが際立った場面でしたね。周が何発銃を撃ったのかを数えていて、それによって自分はもう安心だという確固たる信念を持った姿がとても格好良かったですね。周のはったりと仮面の男のスキルが見事に交錯している場面に心からドキドキできました。すごく内容が濃くて物語にドキドキ感が生まれていることを実感できます。
『彼は『これ』は復讐ではない、と言った』26巻	周が謎の人物に至近距離で銃口をつきつけて、大ピンチだと焦ったところで、残念でした弾はもうないよと冷静につきつけて周を絶望させる展開があざやかで、スカッとしました。ただ、ラスボス的存在である周との決着がついてしまい、この後謎の人物は周をどうするつもりなのか、目的を果たしたことで存在意義を失って自ら命を絶ててしまったりしないか、心配になりました。
『彼は『これ』は復讐ではない、と言った』27巻	幼少時代の周は本当に優秀でなんでもできるパーフェクトマンと言ってもいいです。ですが龍吉が現れたことで周が唯一勝てないものが見つかってしまったことが切ないですね。将棋で彼に勝てなかったことが周の気持ちを変化させたことは間違いないと思います。個人的に龍吉は周にそこまでの感情はなかったように思いますね。でも人間の欲というのは本当に根深いものでそれがひどいことにつながったのでしょうかね。
『彼は『これ』は復讐ではない、と言った』27巻	龍吉に将棋で負けたことが周の中では大きなものに膨れ上がってしまったのでしょうかね。個人的に龍吉もある種の加害者になってしまったように思います。今までは完全に被害者の立場でストーリーを見ていましたが実は周も傷ついていたとわかると色々見方が変わってきますね。どちらにもそれぞれいろんな心情があって面白いです。
『彼は『これ』は復讐ではない、と言った』28巻	本当に仮面の男は復讐をして何かを得たのでしょうか。虚しさか残らないように思ってしまいますね。黒歴史を抱えて生きていくのは辛いですが、復讐してこの世から亡きものにしてしまうというのも考えものだと強く思いますね。残るのは虚無感と後悔だけのようで本当に考えさせられる作品だと強く思いますね。
『彼は『これ』は復讐ではない、と言った』28巻	周が龍吉を非道な手段で陥れた理由が、まさか将棋で角松に負けて、その角松に龍吉が勝ったから・・・というものだったとは、非常に驚きましたし、そんなことでなんの罪もない人間1人の人生をめちゃくちゃにしたのかとモヤモヤした気分になりました。しかも当然のように周は後悔も反省もしていなくて、とことんイヤな奴として描かれており、ある意味清々しいなと思いました。
『彼は『これ』は復讐ではない、と言った』29巻	角松がここまで龍吉に興味を持っていたというのが意外でした。今や角松は時の人です。学生時代に将棋を指しただけの龍吉のことなんて、それ程気にかけていないと思っていました。普通、誰ともわからぬ相手に呼び出されたからといって、行かないと思いますから。それだけ角松は龍吉に気をかけていたんでしょうね。今回で周への復讐は終わりました。覆面男が次のターゲットとするのは誰なのでしょう。今回の展開が気に入ります。
『彼は『これ』は復讐ではない、と言った』29巻	まさか、ここで北斗が登場するとは思いませんでした。北斗が仮面の男とは考えることができないし、ますます仮面の男の正体が気になります。本当に本人なのでしょう。あと、きちんととどめを刺したところはGOOD。

『彼は『これ』は復讐ではない、と言った』30巻	龍吉が二重人格だったことに驚きました。そしてひどいことが原因で、片方の人格が消失していたことにも。しかし、これで腑に落ちた部分もあります。角松が龍吉と対峙した時、本当に龍吉なのかと違和感を覚えたことがありました。角松の気のせいではなく、これが原因だったんでしょうね。覆面男が復讐ではなく仇討ちだと言ってましたけど、納得出来ました。
『彼は『これ』は復讐ではない、と言った』30巻	なんと二重人格だったとは。しかも、龍吉が消えてしまった描写もすごく悲しいです。そりゃ仇討ちしたくなるものです。これが、復讐ではなく、仇討ちだという理由だったのですね。仇討ちを果たしたけど、今後どうなるのでしょうか？
『彼は『これ』は復讐ではない、と言った』31巻	今回はすっきりしました。というのも、小枝がなぜ重要なノートを持っていたのか疑問に思っていたからです。角松との会話のシーンを見た限りでは、覆面男だとは思えませんでした。演技していた可能性もありました。そのあたりが今回のことで全て明らかになったので、良かったです。気になるのは宮山です。覆面男の影響を受けすぎているように感じました。これが新たな火種になるのではないかと心配しています。
『彼は『これ』は復讐ではない、と言った』31巻	エピローグ的な感じになっていましたが、最後の最後に次がありそうな終わり方をしていましたね。今後は北斗が仮面を被る番でしょうか。とはいえ、これ以上なにをやるのかは想像が付きません。周の家族が仮面の男に対して報復をしようとするのでしょうか。
『彼は『これ』は復讐ではない、と言った』32巻	今回で色々な謎が解けてスッキリしました。当事者にとって、過去だと割り切れない気持ちは十分わかります。しかし、仇討ちを決行するまで六年経過していたという点に違和感を感じていました。復讐するために準備期間が必要だったとしても、これは少々長すぎますから。また、その理由がわかったことで、覆面男は誰なのかという点もハッキリしたように感じました。
『彼は『これ』は復讐ではない、と言った』32巻	復讐を終えて終わりと思いきや、まだまだ話が続きそうです。そうすると、次の主人公が気になりますね。小野川か角松か、それとも龍吉がそのまま主人公として描かれるのか、色々気になる終わり方でした。
『彼は『これ』は復讐ではない、と言った』33巻	またしても悲劇が起きてしまった。そんな気配を強く感じさせる展開でした。その結果として、再び覆面男が動くことになったのだとすれば、因果が巡っているような重さも伝わってきます。時代が変わっても、悪意を持つ人間は絶えないのだと痛感させられました。伴田を始末することはできましたけど、この先は難しそうです。伴田の死亡した場所が普通ではなかっただけに、恭介は何者かに狙われていることに気づきました。恭介達に警戒されている中、覆面男はどのように復讐をやり遂げるのか注目したいです。
『彼は『これ』は復讐ではない、と言った』33巻	次の章が始まったと思いきや、まさか十数年も時が経つとは思いませんでした。てっきり、あのあとからすぐの物語が始まると思っていたので意外です。そして、早々に仮面の男が現れました。個人的には、警察の小野川が今回の仮面の男なんじゃないかなと予想しています。